

「JENESYS2017」2017年度中国高校生訪日団第4陣

参加者の感想（抜粋）

◆Aコース 第1分団

○日本といえば“畦道に紅の桜、池端には緑の柳”といった美しい景色が目浮かぶ。12月5日、私は中国高校生訪日団第4陣の一員として、ずっと憧れだった日本へ飛んだ。この9日間、日本人の優しさや温かさを肌で感じた。

東京から鹿児島へ行く飛行機から見た真っ白な富士山は壮観だった。鹿児島では湾を挟んで白い噴煙を上げる活火山―桜島が見えた。初めて火山の温泉にも入った。いずれも一生の思い出だ。12月8日、鹿児島県立鹿屋工業高校を訪れた。期待と緊張のバスの中、私は日本の高校生に好印象を残したいと思っていた。車窓から見える山々の木々に時折楓の赤が映え、思わず学校近くの名勝梅湖を思い出した。八大山人記念館の真っ白い塀が緑の木々や赤い花々に映える景色と似ていて、緊張していた気持ちが次第に落ち着いた。

校門を入り、鹿屋工業高校の皆の眩しい笑顔に感化された私は、すぐに打ち解けていった。私は男子ばかりの機械科に振り分けられ、彼らが製作した簡易式電動平衡車を見せてもらった。私達の学校の工業ロボット専攻と同じような感じで、今後、機械科の皆さんが私達の学校の機械電気部を訪問する機会があればきっと双方話題が尽きないだろうと感じた。驚いたことに機械科の授業の中に調理実習があるのだ！

わずか1日の学校交流だったが、日本の高校生と友達になり、プレゼントと連絡先を交換した。今後どれだけ離れても心はずっと繋がっている。

○今回の日本訪問は東京一地方―東京で、全てが印象深いものだった。東京では随行の通訳ガイドの方が観光地や文化習慣を紹介してくれた。

日本滞在9日間で学校訪問が2回あった。皆とても気さくで、バスが到着するといつも私達に向かって手を振ってくれた。訪問中も私達を友達扱いしてくれた。言葉の壁はあったが、スマートフォンや翻訳ソフトや身振り手振りで頑張って乗り越えた。一緒にゲームで遊び、授業を受け、掃除をし、礼儀を学んだ。電子科の授業では電子ピアノの回路を作った。私はコンピュータ専攻で電子のことはあまり詳しくないが、授業を受けるうちにだんだん興味が湧き、最後には電子ピアノで“星”というお馴染みの童謡を披露した。

今回は他に天皇の住む皇居の二重橋から人で賑わう浅草寺、芸術感溢れる国立近代美術館工芸館から科学技術のパナソニックセンター、太古の縄文の森から本格的な畳の温泉旅館、そして美しい奄美の里や薩摩切子の工房等も見学した。あらゆるところにたゆまぬ努力、妥協しない匠の精神が表れていた。知恵と心を遺憾なく注ぎ込みつつ質を追求し、時間と経験を費やして生涯を通じ、ただ一つのことを極める。その偉大な匠の精神に習いたいと思う。

この日本訪問で、将来自分の仕事に誇りを持つための“希望の灯”を得た。必ず努力して匠の精神に習い、忠実に働いてより良いものを生み出していきたい。

◆Aコース 第2分団

○日本の2つの高校で過ごした2日間が忘れられない。彼らの熱意で私達の距離がぐんと縮まった。5つの授業を受け、日本の高校生の授業中の様子がよく分かった。私が見たところ、日本の授

業は発言と話し合いが主体で、中国の能率的なピンポイント授業とはやはり少し違う。学生が進んで参加し、考えることで素晴らしい効果が出ている。部活動見学で長崎東高校剣道部の稽古を見た。剣道は日本の国粹であるが、私達貴陽一中書画部の学生が宣紙にのびやかに筆を滑らせる様子を思い浮かべた。両国若者達が頑張って文化の伝承に一役買っているのだ。

日本の学生の清潔好きも見習いたい。私も生活の中で気を付けてはいるがまだ少し劣る。そういう所をもっと大事にしないといけない。

○匠の精神とは、手仕事のものづくりに限らず、自分の職業や仕事に対し湧き出る情熱と敬意である。以前どこかで聞いたこの言葉を、今回の訪日でじっくり味わえた。

まずはTOTOミュージアムだ。日本はおろか、もはや世界のTOTOだが、現状に満足して立ち止まることなくたゆまず前進し、絶えず新しいものを生み出している。水まわり製品に対する情熱がなければ、研究を重ねて製品を改良することなどできないだろう。

次は北九州市漫画ミュージアムだ。私は一アニメファンとして、漫画の世界は漫画家が心血を注いで作り上げたものだというをよく知っている。絵の一つ一つにその漫画家の情熱がこもっている。ミュージアムの5万冊を超える蔵書から、不眠不休で夜通し作業機に向かう漫画家達の姿が目に見えてくる。漫画へのこだわりなしに素晴らしい漫画が描けるだろうか？これも匠の精神ではないか。

他にも印象深かったことはたくさんある。例えば観光地の建造物は匠達が煉瓦や瓦を積み上げて築いたもので、店に並ぶ手の込んだ工芸品は一つ一つ匠の手によって作られたもの…匠の精神は一種の風潮だと思う。その風潮の中で誠意や責任感という特性が生まれ、いつしか民族全体が感化されたのだろう。

今後私は自分に厳しく、頑張って“匠”になれるよう、もっと素晴らしい自分を目指し一歩ずつ進んでいきたい。

◆Aコース 第3分団

○今回の訪日のテーマは“ものづくり”だ。中国高校生訪日団の一員として日本で交流に参加でき光栄だ。

まず私達は東京で北條規先生の“日本のものづくりの発展と精神性について”のお話を聞いた。このセミナーを通じ、工芸品作りに妥協しない精神や日本製品が世界で人気の理由がよく分かった。これも私達が今後学ばなければならないところだ。私は日本の製品は“小さい”ことが最大の特徴だと思うが、使いやすさの面でも大変よく考えられている。

この数日間、歴史ある建物の見学もしたが、これも匠の技の結晶だ。私達は綺麗な景色を見て地元の文化を学び、日本人の信仰—平和を知った。

一番印象深いのは波佐見町の陶芸と棚田だ。陶器はとても精巧に出来ていて、棚田は世界最長だ。それに、からつ曳山展示場には十数台の曳山がずらりと並び迫力満点だ。ここにも匠の技が表れている。

日本は面積も小さくその70%は山林だが、地面は衛生的で、水道水も飲める。これは中国が学んで改善すべき点だと思う。

一番楽しかったのは長崎と福岡の学校交流の2日間だ。学生も先生も大変親切でクラスの雰囲気もいい。国内では少ない部活動も体験し、新しい友達がたくさん出来た。

最後にもう一度言うが、日本に来られてとても幸せだ。これから真面目に勉強しようと思う。そしてもっとすばらしい中日関係ができればいいなと思う。

○忘れられない日本の旅になった。今回の訪問で喜びを感じ、友情を得、匠の精神を知った。中でも忘れられないのは学校交流だ。

初めて訪問する時、私は日本の高校生との間に隔りを感じるだろうと思っていた。でも弁当を持って教室に入った時、温かい飲み物を手渡してくれたり、Rap Monster という自分の英語名と BTS のチャットを立ち上げたことを教えてくれたり、その度私は心に温もりを感じた。私達は国や言葉の壁を越え、心と心で交流した。とても楽しくて全く疲れなかった。別れの時、皆一生懸命手を振ってくれた。私達もバスの中から手を振り応えた。ほんのひとときだったが、お互い人生の大事な思い出になった。また会えるかどうか分からないけど、今が最高すぎて、これ以上の未来を望むとバチが当たりそうだ。

今後、勉強や生活の中で日本の匠の精神を見習いたい。仕事に対して手を抜かず、将来、全世界の発展のために少しでも役に立ちたい。

◆B コース 第1分団

○9 日間の訪日で、異なる学校を見学し、異なる場所の民族文化や歴史文化に触れた。1 日目は東京に着いた。東京ではセミナーがあり、日本のものづくりと精神性の話を聞いた。日本の匠は小型化した便利な物をよく作るが、その時考えるのは使いやすさと人に迷惑をかけないことだそう。このセミナーには感じるものがあった。私は普段から大雑把で細かいことをないがしろにしてよく人に迷惑をかけている。セミナーの話を聞いて自分のこの悪い癖を直したいと思った。3 日目は熊本県に行き、工芸品作りを体験し地元の温泉に入った。どちらも心を落ち着けて、やってみて初めてその面白さを味わえる。また熊本県立八代工業高校と名古屋大学教育学部附属高校に行き、一緒に授業を受け、実習を見学した。熊本県立八代工業高校では女子が溶接しているのを見て驚いた。女の子が溶接なんて！その時も少し信じられない気持ちだったが、確かにこの目で見たし、やはり感心した。これからは頑張って勉強し、今までやったことがないことをやってみたい。

○“人生は旅だ”というが、今回の訪日は私の人生の旅路に深い思い出を刻んだ。両足で日本の国土を踏みしめた時、異なる土地や人々に自分がとてもちっぽけに思えた。一番感動したのは礼儀だ。人に向かってお辞儀をするとその人も必ずこちらに向かって礼を返してくれる。例えば毎日のバス乗降時、運転手さんはいつも礼儀正しく親切だ。こちらが一言挨拶すれば、誠実な眼差しと優しい微笑みで挨拶を返してくれる。日本では礼儀が徹底していると感じた。

物事に集中し、ひたむきなところも日本人の大きな特徴だ。運転手さんのバスは安定した走り、
“穏やか”に動き始め、急がず焦らず運行し、静かに止まる。これも匠の精神の表れだ。

そして使いやすさを追求し、真面目に取り組むところ。羽田空港でも熊本空港でも、責任感ある真面目な職員に感心の溜息が出た。人に優しいデザインも数知れない。例えば空港の消火栓の上部に緊急救助電話が設置してある。部屋の電気は手を伸ばせば届く。このように人のためにデザインされたものは皆高品質だ。

今回のテーマはものづくりだったが、本当に勉強になった。匠は心をこめて製作し、使う人の気持ちも考える。どの匠もひたむきで一途で真面目で、相手の身になって考えるという信念を持って

いる。生活の中でも人に迷惑をかけず自活し、真面目に励んで人と仲良くできればきっとこの上ない喜びを感じられると思う。

◆Bコース 第2分団

○訪日で一番印象深いのは学校交流だ。私達が訪問した熊本県立八代清流高校と名古屋市立名古屋商業高校はどちらも大変親切で、授業は活気があって温もりを感じた。共に学び合い、分かり合い、交流し、すぐ学校の雰囲気馴染めた。交流する中で英語がとても大事だと分かった。帰ったら絶対にもっと英語の勉強をしようと思った。本当にすごく大事だ。

交流では言葉のコミュニケーションが少し難しかったが、知り合いたい、分かり合いたいという熱い気持ちは伝わってきた。話し合い、互いの国や学校や地元の文化を紹介し、共に鑑賞し、日中の違いも感じた。例えば1時間の時差、部活動文化、生活様式の違いだ。共通点は“匠の精神”で、私達が皆持っているものだ。それは仕事に関する責任感、モラル、能力、質の表れであり、優れた創造性でたゆまず品質を極める顧客優先のサービス精神だ。また、学校の違いは一方が普通高校でもう一方が商業高校だが、どちらも国や社会の発展のために知識を増やし、異なる文化を学んでいる。今回の交流で新しい友達がたくさんできた。

この先、交流できる機会がもっと増えればいい。両国の友好関係を大事に守り、世界中の人達が素晴らしい生活を送れるよう、共に努力して両国の友好関係を発展させていきたい。

○12月8日と12月11日にそれぞれ熊本県立八代清流高校と名古屋市立名古屋商業高校を訪問した。どちらの学生もすごく親切で、言葉の壁はあったが主に身振り手振りで言いたいことを伝え合い、交流には何の支障もなかった。別れの時の情景もまだはっきりと目に浮かぶ。期間中いろいろな所を見学した。中でも熊本城はとても感動した。石や瓦の一つ一つが緻密な計算の上に組み立てられ、このような城を築くのに多大な時間と精力を費やしたことだろう。ここにも優れた匠の精神が表れている。またガイドさんや運転手さん、ホテルやレストランのスタッフ等、初対面の私達にも笑顔と気配りで接してくれた。これが仕事に対する心得というものだろう。もうすぐ新社会人として働く私にとっては素晴らしいお手本だ。人と誠実に接することは重要なことなのだ。

中日の共通点と相違点が一番はっきり表れるのは多分、食卓だ。どちらも米が主食、箸で食べる。でも中国は料理を温かいうちに食べるのに対し、日本は生ものや冷たいものが多い。同じように道路の横断、礼儀、生活様式等にも現れている。一番心に残っているのは熊本県立八代清流高校に着いた時のことだ。小雨が降り出し、車窓のカーテンを開けて見たら、学生が三人、傘もささずにきちんと立って待っていてくれた。心遣いを感じた。

◆Bコース 第3分団

○今回の訪日では名古屋の友禅染めが印象深い。染色の過程で匠の精神のすごさを体感した。心が静まり、ただ染色にだけ集中する。友禅染めは元禄時代の扇絵師“宮崎友禅齋”が始めた技法で、和服の雛形が元になっている。今日の京友禅は工程ごとに専門の職人が製作し、全体的に“豪華絢爛”な物が良いとされる。体験してみて職人の技に対するこだわり、少しの妥協も許さず、お金のためとはいえ、一つの作品に生涯をかける信念を知った。

○今回訪問した熊本県立熊本西高校で、日本の高校生と一緒に英語と家庭科の授業を受けた。料理

が全くダメな私は、日本の高校生に手取り足取り教えてもらい、ついに熊本のご当地おやつが完成した。一緒に労働の成果を味わいながらお喋りして、すごく楽しかった。

愛知県立東海南高校のバレー友善試合もすばらしかった。学び合い、技術を磨く、そのファイトある姿勢からも私は匠の精神を感じた。匠の精神はいたるところにある。物事を真剣に徹底的に取り組み、妥協せずに完璧を目指す心こそ、匠の精神なのだ。

○今回の訪日、事前研修を含め、わずか2週間の間に、いいなと思ったことがたくさんあった。まず日本の第一印象は街が整い清潔感があるということだ。きっちり並ぶ建物も新鮮さを覚えた。次に、熊本県立熊本西高校を訪問したことが一番印象深い。私達は実際に茶道や剣道、柔道等の日本文化に触れて理解した。特に忘れられないのは先生と学生達の熱意だ。ものづくりのテーマに関する見学では名古屋の友禅染めを体験した。観光地の建物の中では友禅染め工房が一番シンプルかもしれない。屋根は低く、物干しロープが渡してあり、ポットが湯気を立てる側で時々柴犬が吠えている。これが日本家屋の実際といえよう。和服柄の手描きは複雑で、男の私には難しかったが、それでも楽しかった。特に自分の作品を持って先生と一緒に写真を撮った時はとても誇らしい気持ちだった。

今回“ものづくり”というテーマだが、日本製品の細部には学ぶポイントがある。例えば朝食のナプキンの袋には一カ所切り込みが入れてある。シンプルな仕掛けだが、とても使いやすい。またトイレットペーパーは100秒以内に溶ける。衛生的で紙の節約にもなる。違う業界では例えば北京から東京への移動の際、搭乗したANAの飛行機で、客室乗務員に空のペプシ缶を貰えないか頼んだところ、まずは丁重に断られたのだが、なんとその後ANAの葉書を3枚くれたのだ。客の些細なことをも心に留めるサービスに感動した。ANAがフォーチュングローバル500になる理由が分かる。